九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

漢語「失神」の語形成について

金，香梅
九州大学大学院 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/4402945

出版情報：文獻探究. 58, pp.40-27, 2020-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

漢語「失神」の語形成について

金　　香梅

1.はじめに

現代語で漢語「失神」は「意識が完全になくなっている状態。気絶。」の意味で用いられる。『日本国語大辞典(第二版)』には「失神」とあわせて「失心」の表記も収録される。管見で、奈良時代から江戸時代にかけて仏書と漢文訓読資料に用例がいろいろ見え、仮名文学作品に全く確認されない。詳しく、仏書と『群書類従(正・続・続々)』に「失神」「失心」の両表記が見え、それぞれ「神気を失う」「本心を失う」を示す。ところが、『日本三代実録』『小右記』『平安遺文』などに上述の用法と異なる「失神」が数例確認される。簡単に例を挙げると、次のようである。

(1)

a 丙午、夜亥時、紫宸殿前有二長人一、徃還徘徊、内竪傳點者見レ之、惶怖失レ神、右近衛陣前燃レ炬者、亦復得レ見、其後左近衛陣邊有下如二絞者一之聲上、世謂二之鬼絞一也、

（日本三代実録　巻第卌九　光孝天皇　仁和二年七月廿九日）

b 辛丑。申時、地大震動、経歴数剋震猶不止。天皇出仁寿殿、御紫宸殿南庭。命大蔵省、立七丈幄二、為御在所。諸司倉屋及東西京廬舎、往往顛覆、圧殺者衆。有失神頓死者。亥時又震三度。五畿内七道諸国、同日大震。官舎多損、海潮漲陸、溺死者不可勝計。其中摂津国尤甚。」夜中東西有声、如雷者二。

（日本三代実録　巻五十　仁和三年七月卅日）

(1)の a で「夜亥時、紫宸殿の前に長人が往復して徘徊する。内竪が伝点する時これを見て、惶怖して失神する。」を表し、 b で「諸司の倉屋と東西京の廬舎は往往顛覆し、圧されて死んだ者が多い。失神して頓死した者がいる。」を表す。ここで、「失神」は「惶怖」「頓死」と対応し、文脈上其々「夜中紫宸殿の前を徘徊する長人を見て、内竪は怖がって意識を失う。」「地震で倉屋と廬舎が倒壊し、下敷きになった人は意識を失って死亡する。」などの意味が読み取れる。因って、(1)で「失神」は「意識が完全になくなっている状態」を表すことが確定できる。

漢語「失神」は平安時代に数例確認されて以来、全く見えず、明治期になって再び現われる。近代文学作品などに頻用され、次第に現代語へ定着される。

一方、中国語において「失神」と「失心」は二語で、それぞれ多様な使用様相を示す。仏書の場合、日本語と同様な使用様相が観察される。韻文、散文の場合、「失神」は唐

代より「何かに気が取られて集中しない」意味で用いられ、清代に「気が違う」「意気消沈(する)」などを表す用法も見えるが、次第に「意気消沈(する)」意味だけ残存する。一方、「失心」は宋代より「本心を失う」「気が違う」などを表す用例が少し見えるが、次第に消えてしまう。

上述の内容を通し、漢語「失神」はその語形成において中国語と深く関連され、日本語の中で大きな変化が起きたことが推定される。古代の日本語と中国語に使用されるが、その使用様相に相違点が存在する。漢語「失神」は平安時代に数例見えて以来、長い時間断層され、明治期以降再び現われて使用される。「失神」が断層された各年代に「失心」の用例がいろいろ見えるが、意味上相違する。本稿では、このような問題点を念頭に置き、中国語との繋がりを研究視野に入れ、漢語「失神」の語形成とその使用様相について通時的に考察する。

2.中国語における使用様相

2.1「失神」について

『漢語大詞典』に「失神」は収録されていない。本稿では、仏書、韻文、散文に分けて用例調査を行った。

まず、仏書の場合今回の調査で 2 例確認される。

(2)「經言。失魂即亂。失魄則狂。失意則惑。失志則忘。失神則死。」

(大蔵経　釋禪波羅蜜次第法門巻　第八) (大蔵経　宗鏡録巻　第二十四)

(3)於時弊鬼神　凶暴行毒害　取比丘精氣　令命無有餘　比丘多疾病　羸劣無氣力　失神顔色變　勤苦遭衆厄

(大蔵経　第四十九巻　佛使比丘迦旃延説法沒盡偈　百二十章)

(2)は『大蔵経』に 2 箇所見え、「霊魂を失うと乱れ、魂魄を失うと狂い、意志を失うと迷い、志気を失うと忘れ、神気を失うと死ぬ。」を表す。 (3)で、「比丘は疾病が多く、体が弱くて気力がない。神気を失って顔色が変わり、苦労して衆厄に遭う。」を表す。用例数は少ないが、上記の用例を通し、仏書において「失神」は神霊界の神気、精神などと関連し、「神気を失う」「精神を失う」を表すことが分かる。

次に、韻文、散文の場合多様な使用様相が観察される。

(4)郁头蓝子步自王宫至彼法林。宴坐入定心驰外境。栖林则乌乌嘤啭。临池乃鱼鳖諠声。情散心乱失神废定。　(大唐西域記　巻第九　摩揭陀国下)

(5)先生固大賢，擬議何可鄰；諸君又相得，熱炙香相薫；而我拱其间，貪喜欲失神。

(宋　王令　別張粤南夫温子堅元白滿執中子權黄翼端微)

(4)で、「郁头蓝子は王宫から法林まで歩いて行った。静座して入定する時専念できない。森の中に座ると、鳥の鳴き声だけ聞こえ、池のそばにいると、魚と亀の音が聞こえ

る。心が散乱し、精神が分散して廃定する。」を表す。(5)で、「而も我が其れを拱する間、貪喜して心を失う。」を表す。このように、「失神」は「集中しない、精神を分散する」「いつもの心もちを失う」などを表し、人間の心理を表現する。

(6)刘由此病癫，日作鬼语，悉不可晓，周以印花制之，不效。惟偻身而行，如负重状，每见杏花，则悲喜追逐，杏花亦不禁凄恻，泣数行下。周公以其怪，令二人不复相见。杏花从此失神，或罢绣独语，或停食自伤，几次投缳，皆被同人所觉。

(清代　刘大宾　夜譚随录)

(7)「文清失神地站起来，缓缓地向自己的卧室走。」　(1941 年　北京人　曹禺)

(8)癫痫病，是一种常见多发病。据有关资料表明，我国癫痫病患者约有 500 万人，每年新增 30 万人，是一种严重危害人民健康的疾病。该病主要症状为突然昏倒，不省人事，肢体抽搐，两目上视，口吐白沫，面唇青紫或突然失神等。

(人民日報　1998 年 8 月 4 日　「治癫专家王文生」)

(6)で、「周公はそれが怪しいと思って二度と二人を会わせなかった。それ以降、杏花は失神し、独り言を言ったり、食事もせず悲しんだりする。」を表し、ここで精神状態が異常なさまを示す。(7)で「文清は気が取られたようにぼうとして立ち上がり、ゆっくり寝室へ向かう。」を表し、(8)で「癫痫病は、(中略)　顔と唇の色が黒っぽくなる。或は突然意識を失う。」を表す。ここで、清代以降「精神状態が異常なさま」「意識が完全になくなる」などの身体的状態を表す用例が少し見えるが、次第に消え、(7)の「何をする気力がなくなり、意気消沈(する)」だけ残存する。

上述の内容を簡単にまとめると、次のようである。イ、仏書の場合、神霊と関連する「神気を失う。精神を失う。」意味で用いられる。ロ、韻文、散文の場合、唐代より「何かに気が取られて集中しない。精神を分散する。」「本心を失う。いつもの心もちを失う。」などの意味で用いられ、清代より「精神状態が異常なさま」「意識が完全になくなる」「意気消沈(する)」などを表す用例が少し見える。但し、現在は「意気消沈(する)」だけ残存する。

2.2「失心」について

「失心」は『漢語大詞典』に収録され、「精神失常」に解釈される。『大漢和辞典』にも収録され、「1.本心を失ひ、ぼんやりすること。2.心が狂ふ。氣が違ふ。精神病をいふ。3.氣絶する。失神。」などに解釈される。

まず、仏書に「失心」が多く見え、全部「本心を失う」を表す。

(9)父見子等，苦惱如是。依諸經方，求好藥草。色香美味，皆悉具足。擣篩和合，與子令服，而作是言。此大良藥，色香美味，皆悉具足，汝等可服，速除苦惱，無復衆患。其諸子中，不失心者，見此良藥，色香俱好，即便服之，病盡除癒。餘失心者，見其

父來，雖亦歡喜問訊，求索治病。然與其藥，而不肯服，所以者毒氣深入，失本心故。

(妙法蓮華経 如來壽量品 第十六)

(10)是咒能令諸失心者畏者説法者不斷正法者爲伏外道故護己身故護正法故護大乘故説如是咒若有能持如是咒者無惡象 (大般涅槃経 巻第一 壽命品第一)

(9)で、「その諸々の子の中で、本心を失わない者は、此の良薬を見ると、色と香りが共に好いので、直ちに服し、病気は全部治る。のこりの本心を失った者は、父が帰ることを見て歓喜し、病気を治してくれることを求める。」を表す。(10)で、「是の咒能く諸の失心者、怖畏者、説法者、不斷正法者にして外道を伏するが為の故に、己身を護らんが故に、正法を護らんが故に、大乘を護らしめんが故に、是の如きの咒を説く。」を表す。

次に、韻文、散文の場合、宋代以降用例が少し見える。

(11)紓國振民，傾鉅橋之粟。約違迫脅，奢去泰甚。燕無留飲，畋不盤樂。物色異人，優游據正。顯不失心，幽無怨氣。 (宋書 列傳 巻五十一 宗室)

(12)「离魂魄，似失心，思昏沉闷围愁浸。白日里忘餐夜废寝，自寻思不知因甚。」

(元代 賈仲名 萧淑蘭 第三折)

(13)失心失路可哀人，忽悟翻哀在自身。痛痒自身自知得，何如鸡犬又乡邻。

(明代 湛若水 长江杂咏十一首 其六)

(11)で、「優れた人を物色し、上手くやり直す。明らかに本心を失わず、少しも怨気がない。」を表し、(12)で、「魂魄をなくすと、心を失ったようだ」を表し、(13)で、「心と正道を失う人を哀れむ」を表す。ここで、「失心」は「本心を失う。いつもの心もちを失う。」を示す。

(14)是時，收將還浙右待闕，已登舟，其日作詩書于船窗云：「西梁萬里何時到？争似懷沙入九泉。」是夕，溺死汴水。初執政以收無正室，疑姦吏謀殺者，方將窮治，會陳公言賣女奠湯事，及得牖間自題之句，方信其失心而赴水也。

(東軒筆録巻之五 五七頁)

(15)王荊公之次子名雱，為太常寺太祝，素有心疾，娶同郡龐氏女為妻，逾年生一子，雱已貌不類己，百計欲殺之，竟以悸死，又與其妻日相鬬鬨。荊公知其子失心，念其婦無罪，欲離異之，則恐其誤被惡聲，遂與擇壻而嫁之。

(東軒筆録巻之七 七七頁)

(14)(15)は北宋の逸事小説『東軒筆録』に見え、ここで「失心」は「気が違う」を表す。(14)で、「方は厳しく治めるため、陳公に会って賣女奠湯の事を言ったところ、陳公から牖間自題句のことを知るようになった。方は收が失心して溺死したと思う。」を表し、(15)で、「荊公の次子雱は太常寺太祝で、もともと心の疾病がある。同郡の龐氏女を嫁

入りする。翌年に生まれた子が自分に似ていないとし、その子を殺そうとする。(中略)荊公は息子の失心を知った後、息子の嫁には罪がないことを念じ、息子から離させようとする。」を表す。

以上、「失心」の使用様相を考察したが、簡単にまとめると、次のようである。イ、仏書の場合、「本心を失う。いつもの心もちを失う。」意味で多用される。ロ、宋代以降、史書、雑劇、詩などに少し用例が確認され、その用法は仏書に類似する。特に、宋代以降「精神状態が異常なさま」を示す用例が数例見え、清代中期以降次第に消える。

2.3「意識が完全になくなっている状態」を表す表現について

古代中国語において、「意識が完全になくなっている状態」を表す表現について考察するため、本稿では中央研究院漢籍電子文献資料庫データベースを利用して簡単に用例を調べた。結果、「気絶」が最も多く見え、元代以降「昏迷」「昏厥」「昏倒」「暈厥」「暈倒」などが用いられる使用様相が観察される。

(16)「武氣絶，半日复息。」　(漢書　巻五四　苏建傳)

(17)「崧被四創，氣絶，至夜方蘇。」　(晋書　巻七五　荀崧傳)

(16)で、「武は気絶し、半日経って意識が戻った」を表し、(17)で、「気絶し、夜になってようやく意識が戻った。」を示す。ちなみに、古代中国語で「気絶」は「意識を失う」「死ぬ」両意味で用いられる。

(18)你明如鏡。清似水。照妄身肝膽虚實。那羹本五味俱全。除了此百事不知。他推去嘗滋味。喫下去便昏迷。

(関漢卿劇曲集　感天動地竇娥冤　第三齣)

(19)「心腹搅痛，時复昏迷。」　(三国演義　第四九回)

(20)「範進因这一个嘴巴，却也打晕了，昏倒于地。」　(儒林外史　第三回)

(18)で、「食べたらすぐ意識を失った」を表し、(19)で、「腹痛で時に意識を失う」を表し、(20)で、「範進は顔を打たれ、意識を失って倒れた。」を表す。

上述のように、古代中国語において「意識が完全になくなっている状態」を表す表現に「気絶」「昏迷」「昏厥」「昏倒」「暈厥」「暈倒」などがよく用いられることが分かる。ちなみに、現代中国語で「気絶」は使わない。

3.日本語における使用様相

本稿では、漢文訓読文、仮名文、和化漢文、和漢混淆文などに分けて用例調査を行った。結果、仏書、歴史書などの漢文訓読文と和化漢文に用例が見え、その他に確認されない。**2** で中国語における「失神」「失心」の使用様相を考察したが、それと比較する視点で、以下「失神」「失心」に分けて各時代における使用様相を考察する。

3.1「失神」について

3.1.1 奈良、平安時代

奈良時代に用例が見えず、平安時代に『日本三代実録』に 3 例、『平安遺文』『小右記』に各 1 例確認される。

(21)

a 丙午、夜亥時、紫宸殿前有二長人一、徃還徘徊、内竪傳點者見レ之、惶怖失レ神、右近衛陣前燃レ炬者、亦復得レ見、其後左近衛陣邊有下如二絞者一之聲上、世謂二之鬼絞一也、(同(1)a)　　(日本三代実録　巻第卌九　光孝天皇　仁和二年七月廿九日)

b 辛丑。申時、地大震動、経歴数剋震猶不止。天皇出仁寿殿、御紫宸殿南庭。命大蔵省、立七丈幄二、為御在所。諸司倉屋及東西京廬舎、往往顛覆、圧殺者衆。有失神頓死者。亥時又震三度。五畿内七道諸国、同日大震。官舎多損、海潮漲陸、溺死者不可勝計。其中摂津国尤甚。」夜中東西有声、如雷者二。(同(1)b)

(日本三代実録　巻五十　仁和三年七月卅日)

c 六日丁未。停釈奠之礼。去月卅日、木工寮将領秦千本、検校修造職院、驚恐地震、失神而死。供祭所司触此穢也。　　(日本三代実録　巻五十　仁和三年八月)

(21)の a、b は前述の 1 で挙げた例文(1)a、(1)b と同様で、それぞれ「夜亥時、紫宸殿の前に長人が往復して徘徊する。内竪が伝点する時これを見て、惶怖して失神する。」「諸司の倉屋と東西京の廬舎は往往顛覆し、圧されて死んだ者が多い。意識を失って頓死した者もいる。」を表す。(21)c で、「木工寮の将領秦千本は、職院を修造する検校を行う時起きた地震で恐怖を感じ、失神して死ぬ。」を表す。ここで、「失神」は「惶怖」「頓死」「死」などと対応し、文脈上それぞれ「夜中紫宸殿の前を徘徊する長人を見て、内竪は怖がって意識を失う。」「地震で倉屋と廬舎が倒壊し、下敷きになった人は意識を失って死亡する。」「地震で恐怖を感じ、意識を失って死ぬ」などを表す。

(22)倉忽出□亡數百人迷心□火勢已熾、人力難耐、此間遷付院堂舎燒亡已了、僅廻方計、奉出御願佛像、爰法華寺與金光明寺相去五丈許、法華寺在北、金光明寺發、吹火煙向南、其危尤在□數人失神、走向件寺、各□希、僅滅遷火、(後略)。

(天暦二年十二月廿八日　太政官府案○書陵部所蔵壬生古文書　平安遺文　四五六二)

(22)に遺漏した箇所が多いが、文脈上当時法華寺と金光明寺の間に位置する倉に火事が起き、煙が金光明寺の方へ吹き飛んで、その煙を吸った数人が意識を失った、という内容が読み取れる。ここで、「失神」は火事で呼吸困難などが起き、意識を完全に失った状態を示すことが確定できる。

(23)辛酉、従攝政殿有喚、破物忌馳參、偸閑被度南院、公卿六七人被參入、聊有食物、権大納言息子福垂去十一日煩腫物今日死去云々、自酉時許大風、及子終止、此間雨

脚更飛、万人失神、　　(小右記一　永祚一年八月十三日)

(23)で、「摂政殿から召しが有った。物忌を破って馳せ参った。暇を窺って、東三条第南院に移られた。公卿六、七人が参入された。いささか食物が有った。「権大納言(藤原道兼)の息子福垂が、去る十一日、腫物を煩って、今日、死去した」と云うことだ。酉剋の頃から大風が吹いた。子の終剋に及んで、止んだ。この間、雨脚が更に飛び、万人は失神した。」を表す。参考に永祚一年八月十四日と十五日の日記内容を調べてみると、それぞれ「門悉倒」「(火事で)東西京人家、佛神寺顛倒、破損不可勝計」などの内容が記される。因って、(23)で「失神」は「意識が完全になくなった状態」を示すと推測される。

3.1.2 鎌倉・室町時代から江戸時代にかけて

鎌倉、室町時代にかけて依然として「失神」の用例は見えない。江戸時代の場合、『群書類従(正・続・続々)』に数例確認され、医学書、辞典などの蘭学・洋学関連の資料に全く見えない。

まず、『続群書類従』に 1 例確認され、『群書類従』に前述の『大蔵経』『日本三代実録』の用例が収められる。

(24)十五日。主水司献御粥事。付女房。(中略)十節記云。高辛氏之女。心性甚暴悪。正月十五日巷中死。其霊為速〔悪歟〕神。於道路憂吟。遇路人相逢。即失神。人々令盗火。此人生時好粥。故以此祭。(後略)

(続群書類従　第十輯上　公事部　巻第二百五十四　師光年中行事　正月　335 頁)

(24)は『続群書類従』に収録される『師光年中行事』の用例で、「高辛氏の娘は心性が甚だ暴悪である。正月十五日に巷で死んで、其の霊は速く悪神に為り、道路で憂吟する。路人に相逢されると、すぐ失神する。」を表す。ここで、「失神」は年中行事を解説するのに引用された古事に見え、仏教と関連する語として「神気を失う」を表す。

(25)光孝天皇　仁和元年乙巳　裏書僧正一人。僧都二人。正権。法眼一人。律師七人。同二年丙午　五月廿九日丙午夜亥時。紫宸殿前有長人。往還徘徊。内竪伝点者見之。惶怖失神。十月四日己酉天皇聖体不予。十一日丙辰屈延暦寺座主法眼和尚位円珍修護摩法。(同(1)a、 (21)a)

(群書類従　第四輯　補任部　巻第五十四　僧綱補任抄出上　陽成－光孝　513 頁)

(26) 次第禅門八云。(中略)経云。失魂則乱。失魄則狂。失意則惑。失志則忘。失神則死。当知外立王道治化皆身内之法。如此等義。具如提謂経説云々。但人身世界相関義。外道神仙等輩皆雖知之。(同(2))

(群書類従　第十九輯　管絃部　巻第三百四十一　管絃音義　11 頁)

次に、『和漢三才図會』『解体新書』『和蘭医方纂要』などの医学書を調べたが、「失

神」は確認されない。そして、『和蘭医方纂要』に「卒倒」「昏迷」「不省人事」「忽然失知識活動之機」「失氣昏冒」「忽然暈倒不識人事」などの中国語が「意識が完全になくなっている状態」を表す表現に頻用される使用様相が観察される。

第三、『和蘭字彙』『蘭語譯撰』などの和蘭辞典を調べたが、依然として「失神」は確認されない。『蘭語譯撰』の場合、「突倒」「頓死」などが訳語として収録される。そして、『英和對譯袖珍辭書』の場合、「Despondent　勢ヒナキ詮方ナキ望ヲ尽キ果シタル」「Syncope 衰弱．気ノ遠クナルコト．文字ヲ省クコト．短縮スルコト」のように収録され、同様に「失神」は見えない。

以上、平安時代に少し見える「失神」は鎌倉時代から江戸時代にかけて断層される様相が観察される。

3.1.3 明治時代以降

明治時代以降、主に近代雑誌、専門術語集、文学作品、辞書などに分けて用例調査を行った。詳しく次のようである。

まず、中納言コーパス検索アプリケーションを利用し、明治、大正の雑誌、国語教科書、口語資料などについて調べた。結果、国語教科書に 1 例確認され、そのほかに見えない。

(27) 自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと、松明を捨てた。まるで失神したやうに、彼はそこに突立つたまゝ、沖の方を眺めてゐた。

(国語教科書　小学校国語 4 期　第十　稲むらの火　1933)

次に、『明治期専門術語集　I医語類聚』を調べたが、用例が見えない。ところが、辞書『哲学字彙』と近代文学作品にいろいろ用いられる使用様相が観察される。

(28)「Syncope 失神」　(改訂増補哲学字彙　1884)

(29)「Despondency　落拓、失心、絶望」　(改訂増補哲学字彙　1884)

(30)「Syncope 失神(精)、語中略、中間略(言)」　(英獨佛和哲學字彙　1912)

上記のように、明治初期の哲学用語を集大成した『改訂増補哲学字彙(1884)』『英獨佛和哲學字彙(1912)』などに「失神」が「Syncope」の訳語として収録されることが確認できた。特に、『改訂増補哲学字彙(1884)』に「失神」は「意識が完全になくなる」を表す英語「Syncope」の訳語として、「失心」は「自信を失う。失望する。」を表す英語「Despondency」の訳語として、それぞれ収録される。因って、当時「失神」と「失心」は異義語として見なされる使用様相が注目される。

(31) 私が正気にかえったのは、それから三十分ばかり後の事でございます。妻は、私が失神から醒めたのを見ると、突然声を立てて泣き出しました。

(芥川龍之介　二つの手紙)

(32) 何時間か過ぎた後、失神した彼はおもむろに、砂の上から起き上った。彼の前には静な湖が、油のように開いていた。　（芥川龍之介　素戔嗚尊）

(33)母はもうおいおいおいおい声を立てて泣いている。民子の死ということだけは判ったけれど、何が何やら更に判らぬ。僕とて民子の死と聞いて、失神するほどの思いであれど、今目の前で母の嘆きの一通りならぬを見ては、泣くにも泣かれず、僕がおろおろしている所へ兄夫婦が出てきた。　(伊藤左千夫　野菊の墓)

(34)私たちはMさんの書斎に通された。小さい囲炉裏があつて、炭火がパチパチ言つておこつてゐた。書棚には本がぎつしりつまつてゐて、ヴアレリイ全集や鏡花全集も揃へられてあつた。「礼儀文華のいまだ開けざるはもつとものの事なり。」と自信ありげに断案を下した南谿氏も、ここに到つて或いは失神するかも知れない。

(太宰治　津軽)

上述のように、「失神」は明治期の洋学潮流に乗って再び現われ、近代文学作品などに頻用される使用様相が観察される。

3.2「失心」について

奈良、平安時代において、仏書にいろいろ見えるほか、『群書類従(正、続、続々)』に収められる平安時代の用例が4例確認される。

(35)自惟孤露　　みなしこと成にし日より世中を厭ふへき身の程はしりにき 如来慈父わかれをつげ給て後。失心の子身をかへりみる事をとく文なり。失心の子とは。煩悩のやまひに沈て佛道をもとめざる衆生なり。

(群書類従　第二十四輯　釈家部　巻第四百四十五　法門百首　述懐　709頁**)**

(36)梵網經不入重。或只入經。或與酒論罪。酒重蒜輕。傳風器者。猶五百世得无手之報。酒失心蒜不失心。但以臭為過。其臭氣在五十日。此間不入堂拜也。

(続群書類従　第十三輯下　消息部　巻第三百五十九　東山往来 1121頁)

(37)其次臍香。乃捕得殺取者。又其文正結香麝。被大獣捕遂。驚畏失心狂走。巓墜崖谷而斃。　(続群書類従　第三十一輯上　雑部　巻第八百九十五　香要抄末 34頁)

(38)第三十代欽明天皇御宇廿九年戊子筑紫豊前國宇佐郡菱形池之畔小倉山之邊有鍜冶之翁帯奇異之瑞爲一身現八頭人聞之爲實見五人行則三人死十人行則五人死他人不死於人々失心而死ス

(続々群書類従　第一　神祇部　宇佐八幡宮縁起上巻　初顯神道坐事　715頁)

上記の用例で、「失心」は仏書の用法に類似し、「本心を失う」を表す。

鎌倉・室町時代から江戸時代にかけて、管見で『鎌倉遺文』『天文日記』『梅津政景日記』などに数例確認され、『群書類従(正、続、続々)』に8例確認される。

(39)心も又身に對すれはこそ、月金にもたとふれ、又過去の謗法を案するに、誰かしる、

勝意丘比か魂にもや、大天か神にもや、不輕輕毀の流類歟、失心の餘殘歟、五千上慢の眷屬歟、大通第三の餘流にもやあるらん、宿業はかりかたし、

(文永九年三月廿日　日蓮聖人遺文　鎌倉遺文　14 巻 361　10997)

(40)天台大師釋云、若値惡友則失本心云々、本心と申は、法華經を信する心なり、失と申は、法華經の信心を引かへて餘經へうつる心なり、されは經文云、然與良藥、而不肯服等云々、天台云、其失心者、雖與良藥、而不肯服、流浪生死、逃逝他國云々、されは法華經を信する人のをそるへきものは、賊人・強盗・夜打・虎狼・師子等よりも、當時の蒙古のせめよりも、法華經の行者をなやます人々なり、

(文永十二年四月十六日　日蓮聖人遺文　鎌倉遺文　16 巻 7　11871)

(41)右、經云、若遇怨敵、結印明、被發善心相向、又云、若怨敵相向、先誦密言、彼失心碎茵、

(正応二年七月廿二日　武藤金太氏所蔵文書　鎌倉遺文　22 巻 268　17073)

(39)～(41)は仏教関連の用例で、全部「本心を失う」を示す。

(42)天気快晴尤満足不可過之。暁者巳及降雨之間、令失心之処、点心以前不雨降。殊日中之時、屡晴日影顕之条、本懐此一事也。　(天文日記　天文廿年十一月廿八日)

(43)今晩よりも我等の知音ハ可差置由申ニ付て、其より亂鳥ニ千牧ロへ人を遣し、彼出雲藤藏をよひよせ、尋候へハ、藤藏申分ハ、彌三あき人ニ候間、細々參候てかい物を致候て、知人ニ罷成候、少も跡々より失心不申よし申候へ共、

(梅津政景日記　慶長十七年十一月廿八日)

(44)未知天高。不降深谷。未覚地厚。安家安国。為忠為孝。略抄。於是邪徒辞窮理喪。結舌亡言。不失心者。問津識済。余失心者。攘臂怒矣。

(続群書類従　第九輯上　伝部　元祖蓮公薩埵略伝 149 頁)

(42)で、「暁に降雨する時は心を失わすところ」を表し、(43)で、「知人である以上、今後も少しも心をかえすことはしません」を表し、(44)で「本心を失う」を示す。

明治時代以降、「失心」は『改訂増補哲学字彙(1884)』に収録されることが確認され、近代文学作品に少し見える。

(45)「Despondency　落拓、失心、絶望」　(改訂増補哲学字彙　1884)

(46)彼は立って百合の花の傍へ行った。唇が弁に着く程近く寄って、強い香を眼の眩うまで嗅いだ。彼は花から花へ唇を移して、甘い香に咽せて、失心して室の中に倒れたかった。　(夏目漱石　それから)

(45)で、「失心」は「自信を失う。失望する。」を表す英語「Despondency」の訳語として『改訂増補哲学字彙(1884)』に収録される。ここで、(28)の分析で述べたように「失心」と「失神」はそれぞれ異なる英語の訳語として『改訂増補哲学字彙(1884)』に収録

され、当時異義語として見なされることが注目される。ところが、(46)で「失心」は「失神」と同様に「意識が完全になくなった状態」を表す。 因って、明治期以降「失心」と「失神」は同義、異義の語として併用されることが分かる。ちなみに、現代日本語書き言葉均衡コーパスを利用し、1970 年代から 2000 年代までの用例を抽出してみると、「失神」は圧倒的に多く、「失心」は 6 例しか見えない。

3.3「意識が完全になくなっている状態」を表す和語の表現について

平安時代から江戸時代にかけ、日本古典文学作品における「失神」と同義の表現を考察するため、本稿ではジャパンナレッジ日本古典文学全集のコンテンツを利用して用例を調べた。結果、『源氏物語』『平治物語』に「息絶える」が見え、江戸時代の小説などに「気を失う」「気絶える」「気絶」などが用いられる使用様相が観察される。

(47)息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、 (源氏物語　桐壺　23 頁)

(48)同じき五日、左馬頭義朝が童金王丸、常葉が許に忍びて来たり、馬より崩れ落ち、暫しは息絶えて物も言はず。

(平治物語　中　金王丸尾張より馳せ上る事　490 頁)

(47)で、「息も絶え絶えに申し上げたそうなことのある様子だが、」を表し、 (48)で、「同五日、左馬頭義朝の童金王丸が常葉の許に人目を避けてやって来た。よほど疲れているらしく、馬から崩れるように落ち、しばらくは気を失っているらしく何も言わない。」を表す。

(49)何れも眼くらみ、気を失ひ、命を不思議にのがれ、その年中は、難病にあへり。

(井原西鶴集(2)　西鶴諸国ばなし　巻二　姿の飛び乗物　52 頁)

(50)親子は気絶てしばしがうち死入りけるが、 (雨月物語　巻之三　仏法僧　341 頁)

(51)一箇の大漢に撞見して、蹴られて気絶したりける、

(近世説美少年録(3)　新局玉石童子訓　巻之二十四　第五十四回　438 頁)

(49)で、「皆々眼がくらみ、気を失った」を表し、(50)で、「夢然親子は気を失って、しばらくは死んだようになっていた。」を表し、(51)で、「一人の大男に出会って、蹴飛ばされて失神した、」を表す。

上述のように、「意識が完全になくなっている状態」を表す表現において、平安時代に「息が絶える」が見え、江戸時代以降「気を失う」「気絶える」「気絶」などが頻用されることが観察される。

4.「失神」の語形態、意味形成に関する分析

前述の 2、3 で主に中国語、日本語における「失神」「失心」の使用様相を考察した。前述の内容を踏まえ、中国語との関係を研究視野に入れ、次に「失神」の語形態の由来、その意味形成について簡単に述べる。

古く仏書に「失神」が見えるが、意味上神霊と関連して「神気を失う。精神を失う。」を表す。中国の漢籍の場合、唐代より「何かに気が取られて集中しない。精神を分散する。」「いつもの心もちを失う」などの人間の心理と関連する用例がいろいろ見える。一方、日本語において、平安時代に「意識が完全になくなっている状態」を表す「失神」が数例確認される。因って、「失神」の意味とその用法は大きく神霊関連、人間の心理関連、人間の身体関連など、三つのパターンに分けられる。ここで、神霊関連の用法は形而上に属され、人間の心理関連と身体関連の用法は形而下に属されると思われる。上述の内容を踏まえ、「失神」は古代中国の漢籍から由来したと想定される。

「失神」の意味形成において、本稿では三つの要因と緊密に繋がると想定される。詳しく、日本語における「神」を語構成要素とする漢語の使用特徴、「失心」との関係、明治期「精神」「神経」などの医学用語の頻用、などが思い付かれる。次に、それぞれの繋がりについて簡単に述べる。

まず、日本語における「神」を語構成要素とする漢語の使用様相について考察するため、ジャパンナレッジ日本古典文学全集のコンテンツを利用して調べた。結果、ほとんどが「神事」「神殿」などのような神霊、神様と関連する漢語で、「心神」「神心」が異なる意味で用いることが観察される。これについて先行研究で詳しく論じている。

栗竹民(1994)で、「心神」は平安時代中期頃から鎌倉時代にかけて公家日記を中心とする古記録類に限って「人間の肉体としての心臓或いはそれを含めての体の状態」という新しい意味で用いられ、それ以外は全部「人間の精神、感情、判断、意識などの心的活動」を表す中国語の意味で用いられることを論じた。同氏(2006)で、「神心」は奈良時代に中国由来の「神・聖人の心」「知・情・意」という抽象的意味で用いられるが、平安時代になって本来の中国語の意味を受容しつつ、公家日記という和化漢文において生理的な心を含めての身体の状態を示す新しい意味が派生されることを論証した。

上述の先行研究を通し、「心神」「神心」はそもそも中国由来の抽象的意味を表す漢語で、平安時代中期頃公家日記を中心とする古記録類に体の状態を表す新しい意味で多用されることが分かる。ここで、「失神」は「心神」「神心」と直接繋がりは見えないが、共通に「神」を語構成要素とし、同じく中国由来の抽象的意味を表す漢語で、平安時代の和化漢文において類似の使用様相を呈することが分かる。因って、「失神」の『日本三代実録』『平安遺文』『小右記』などにおける用法は偶然或は誤用でないことが推定される。

次に、「失心」は古く「本心を失う」意味で仏書に多用される。漢文訓読文の場合、仏書に類似する用法から次第に人間の心を表す意味で用いられる。「失心」は「失神」と同音、類義の特徴を持ち、「失神」の断層された各年代に「失心」は続用される。因って、「失神」は「失心」の影響を受け、明治以降再現し、続用される可能性が想定される。

第三、明治期に「精神」「神経」などの漢語が医学用語として身体と関連して頻用される。『六合叢談』『新爾雅』などに「精神」「神経」から形成された医学用語が数多く確認される。ここで、「精神」は元々抽象的意味を表し、明治期に医学用語として頻用される。因って、明治以降「精神」「神経」を中心とする医学用語の頻用からその影響を受け、「失神」は近代日本語として再生されるようになった可能性が思い付かれる。

5.まとめ

本稿では、漢語「失神」の語形成について中国語と比較する視点から歴史的研究を行った。本稿の観点を簡単にまとめると、次のようである。

まず、「失神」の語形態において、古代中国の漢籍から由来したと想定される。

次に、「失神」の意味形成において、日本語における「神」を語構成要素とする漢語の使用特徴、「失心」との関係、明治期「精神」「神経」などの医学用語の頻用、などの諸要因と緊密に繋がる中で、日本語の中で恣意的に形成されることが推定される。これに関するより詳細な考察は今後の課題としたい。

参考文献

遠藤好英(2006)『平安時代の記録語の文体史的研究』おうふう

沈国威(1995)『新爾雅』とその語彙—研究・索引・影印本付　白帝社

沈国威(2008)『近代日中語彙交流史：新漢語の生成と受容』東京　笠間書院

堀畑正臣(2007)『古記録資料の国語学的研究』清文堂出版

峰岸明(1986)『変体漢文　国語学叢書 11』東京堂出版

峰岸明(1986)『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会

栾竹民(1994)「漢語の意味変化について一「心神」を一例として一」『国文学攷』(142)34－55.

栾竹民(2006)「漢語の意味変化について一「神心」を一例として」『小林芳規博士喜寿記念国語学論集』392－419.

辞典類

『漢語大詞典』　罗竹风(主编) 1994 年　汉语大词典出版社

『大漢和辞典(巻三)』　諸橋轍次(著者)　昭和三十一年十月二十五日　大修館書店

『日本国語大辞典　第二版(第六巻)』　2001 年 6 月 20 日　小学館

『時代別国語大辞典(室町時代編三)』　室町時代語辞典編修委員会(編者)　1994 年 3 月 20 日　三省堂

『日本佛教語辞典』　岩波裕(著者)　1988 年 5 月 20 日　平凡社

『English and Chinese dictionary = 英華字典 : with the Punti and Mandarin pronunciation』 by the Rev. W. Lobscheid　1866－1869　Hongkong : Daily Press

『英華字典』　羅布存徳原著　井上哲次郎訂増　1883 年 9 月　東京：藤本次右衛門
『改訂増補哲學字彙』　井上哲次郎　有賀長雄(増補)　1884　東京：東京館
『英獨佛和哲學字彙』　井上哲次郎　元良勇次郎　中島力造共(著)　1912　東京：丸善
『英和對譯袖珍辭書』　堀達之助(編者)　文久 2 年(1862)12 月　徳川幕府洋書調所
『和蘭字彙』　杉本つとむ(解説)　第I冊・第II冊・第IV冊　昭和 49 年　早稲田大学出版社
『蘭語譯撰』　鈴木博(解題・索引)　昭和 43 年 12 月 15 日　臨川書店

引用したコーパス・データベース

用例の検索にあたって、中央研究院漢籍電子文献資料庫、漢典、大正新脩大蔵經テキストデータベース、東京大学史料編纂所の古記録フルテキストデータベース、古文書フルテキストデータベース、奈良時代古文書フルテキストデータベース、平安遺文フルテキストデータベース、鎌倉遺文フルテキストデータベース、国際日本文化研究センター摂関期古記録データベース、国立歴史民俗博物館記録類全文データベース、九州大学図書館ホームページのジャパンナレッジ日本語国語大辞典・日本古典文学全集のコンテンツ、国文学研究資料館電子資料館吾妻鏡データベース、中納言コーパス検索アプリケーション日本語歴史コーパスなどを利用した。

（きん　こうばい・本学大学院博士後期課程）